

# 進路選択に関する質的データの探索的解析

## —誰が志望の変更や決定に関わるのか—

越智政治(大阪大学大学院)

ochi@hus.osaka-u.ac.jp

### 1. 問題設定

進路選択過程は、志望進路を決定することとそれを変更し、新たな志望を決定することの繰り返しによって成り立っている。

志望の決定や変更は、生徒たちが教師や教育関係者(シコレル&キツセ 1985)・両親や友人(Brooks 2003, 三戸 2001)といった様々な人々と関わりを持つことで生じる。周囲の人々との関わりは、生徒を特定の進路を水路付けるだけではない。反対に、家計や成績などの条件からフリーターを選択する可能性の高い生徒が、ボランティアによる進路支援を受けた結果、進学を選択したという事例も報告されている(酒井他 2003)。

一方、推薦入試の拡大や奨学金の拡充などによって、生徒の志望進路の決定や変更する際の基準は多元化し、生徒の主体性が重視された進路指導が展開されている。それは進路選択に関する門番の不在(荻谷 1997)をもたらしている。これらのことは、進路選択に関わる人々やその働きが様々に変わりつつあることを示している。特にこれは卒業後の進路選択が多様になる中位校・下位校にみられるのではないだろうか。筆者が中位校を対象に行った聞き取りや観察では、生徒たちが様々な人々との進路について関わりをもつ一方で、周囲の人々と進路について明確な接点を持たないまま最終的な進路選択をしたと語る生徒もいた。このような違いは、生徒の進路決定過程にどのように係わっているのだろうか。

そこで、本報告では卒業後の進路が様々な進路に分化する傾向にある普通科中位校の高校3年生を対象とした質的調査をもとに次の2点を検討することを目的とする。

①生徒は、志望進路の決定や変更に関わって

いるとみなしているのか、また誰が関わっていないとしているのか。

②志望の変更や決定にある人物が関わる際、生徒との間にどのようなことが行われているのか

### 2. データ

本報告で用いるデータは、2004年10月から3月にかけて行ったインタビューデータと3年間の志望進路の変容を記したプリント(以下進路シート)の2種類である。対象となったのは、大阪にある府立高校の3年生の20人である。

進路シートは、高校入学から卒業までの期間を生徒自身が記入するもので、インタビュー対象者に記入法を記したプリントと一緒に事前に配布し、3年間の志望進路の変容を記入してくるよう指示した。進路シートには「四大」「短大」などのカテゴリーや具体的な学校名などが記入されている。これをもとに、進路選択に関するインタビューを行った。これによって得られたインタビューデータのうち、進路シートに示された志望変更の理由を尋ねた質問に関する回答を取り出し、これを主な分析データとした。だが、インタビューでは質問とは別の箇所で志望の変更や決定について語られていることもある。そのようなインタビューデータのうち、志望した時期や志望内容が合わせて語られているなど、志望の変更や決定に関連していることが確認されたものは、ある時点における志望の変更や決定に関するデータとみなした。

### 3. 分析方法

誰がどのように進路志望の変更や決定に関わっているのか(または関わっていないのか)、という点を捉えるためには、3年間の進路志望の変化を

示すデータを用意し、それに対応させる形で志望の変更や決定に関わる人物を検討するのがよい。そこで、進路シートに示されたデータを、近藤他(2005)が行ったライフヒストリーカレンダー分析を参考に、各カテゴリーに対応する色を決め、Excelによってグラフを作成した。これにより、色の変わり目が生徒の志望進路の変更に対応することになり、志望の変更がいつ頃起きたのか、またどの程度行われたのかを把握することができる。この変更箇所を分析対象とする。

次に、志望進路の変更箇所に対応するインタビューに登場する人物に対応する記号を作成し、グラフ上にプロットしていく。これによって、どのような人物や出来事が進路の変更に関わっているかを捉えることができる。

そして、これに登場する人物の回数をカウントする。これは、重要だとみなされている人物に言及する回数はその他の人物に関するものよりも多いと想定し、回数によって誰が重要だと見なされているかを把握するためである。その際、登場した全ての人物をカウントするのではなく、志望進路の変更について関与しているものに限る。インタビュー中で同じ人物を示すと見なされるもの(例えば、「お父さん」「父さん」「親父」など)は、同じカテゴリーにまとめていく。ここで設定するカテゴリーは、「父親」「母親」「教師」「同校の友人」「学校外の友人」「自分自身」などである。

最後に、登場した人やその人たちとのやり取りにはどのような特徴があるかを、インタビューデータをもとに検討していく。

#### 4. 結果と考察

詳細な分析結果と考察は当日の発表に委ねるが、以下の点を指摘しておく。

進路シートから作成したグラフからは、最初の志望が四大であったものは変更の回数が少なく、決定進路も四大になっている傾向が示され、男女差はあまり見られなかった。一方で、最初の志望進路で四大以外を選択している者は、変更の回数が多く、入学時の志望と卒業時の志望はほとんど一致しない。また、対象者の多くが女子ということもあるが、変更回数の多い生徒が選択する進路は短大や専門学校が中心であった。

志望変更に関わっているかという点については、まず周囲の人間との進路に関するやり取り

が十分に行われていないという傾向があるように思われる。一方で「自分自身で決めることが大事」という進路の自己決定に対する言及が多くみられた。親や教師が登場する場合、生徒が志望している進路に反対し、進路の再考を促す形で登場することが多いが、それ以外であり親や教師は進路決定の上で重要であるとされることは少ない。

また、友人については、接触頻度の高い「同校の友人」と進路に関する話はあまりせず、むしろ接触頻度の低い「学校外の友人」との話ややり取りによって志望の変更や決定に重要であるとする傾向がみられた。彼らにとって「同校の友人」は進路の相談相手や勉強の競争相手ではなく、学校生活を楽しく過ごすために必要な相手なのである。

このことから、以下のことが推測される。すなわち、接触する機会が多い生徒との間での進路のやり取りが避けられることで進路に関する意識が喚起されにくく、さらに親や教師も積極的に進路選択に関与しないことで、志望の決定が延期された結果、突然進路を決定していくのである。

しかし一方で、進路を周囲の人々とのやり取りによって決定していく生徒もいる。では、変更と決定を繰り返す生徒とそうでない生徒との間には、進路選択について接触する人やその人たちとのやり取りの内容にどのような違いがあるのだろうか。当日は、これらの点についても報告する予定である。

#### 参考文献

- アーロン・シコレル&ジョン・キツセ 山村賢明、瀬戸知也訳 1985 『誰が進学を決定するか』金子書房
- Brooks, R. 2003 *Young People's Higher Education Choices: the role of family and friends* British Journal of Sociology of Education Vol. 24 No. 3 pp. 283-297
- 荻谷剛彦 1997 「大衆化時代の大学進学—く価値多元化社会—における選抜と大学教育—」『教育学研究』64(3) pp. 73-82
- 近藤博之、川村光、古田和久、愛知輝義 2004 「ライフヒストリーデータの探索的解析—社会階層の文脈を探る—」『ライフヒストリーの計量社会学的研究』(研究成果報告書) pp. 1-22
- 三戸親子 2001 「総合学科における生徒の進路意識形成」『教育社会学研究』第69号 pp. 103-122